



図1. 幼獣を確認した巣(巣1)

表1. 巣の計測値

No.	営巣地点の環境	巣高(cm)	植物高(cm)
1	水田法面	145	230
2	水田法面	155	200
3	水田法面	100	135
4	水田法面	117	200
5	放棄田	-	-

*No. 5の巣高と植物高は未計測。

確認出来なかった。巣の植物高はともに120cmを超えていた。植生は2003年と比べてススキの割合が減り、クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi やセイトカアワダチソウ *Solidago altissima* L. の割合が増えていた。

2004年に巣が見つからなかったのは、カヤネズミは120cm以上の草丈の植物に好んで営巣する傾向があり(澤邊ほか, 2005)、2003年と2006年に見つかった巣の植物高も全て120cm以上であったことから、調査時期が早くススキが十分な草丈に達していなかったためと思われる。ススキはオギと並び巣材に利用される割合が全国的に最も高く(全国カヤネズミ・ネットワーク, 2006)、2003年と調査時期が等しい2006年に繁殖が確認出来なかったのは、ススキの被度の減少が要因と思われる。富山県(2002)では本種の生息や繁殖の圧迫要因として草地環境の変化が指摘されており、放

置すれば今後本種の生息に深刻な影響を及ぼすことが危惧される。早急な生息地の保全ならびに、今回未調査の県東部を含む、県全域における生息状況の把握が望まれる。

謝辞

現地調査にご協力頂いたムラーナ野生生物研究所の穴田哲氏、富山市ファミリーパークの加藤真由子氏、白石俊明氏、法木ゆかり氏、見浦沙耶子氏、森大輔氏、全国カヤネズミ・ネットワークの内田憲二氏、道券孝之氏、西村かおり氏、藤塚治義氏、山本聡子氏、生息地情報や文献をご提供頂いた自然植物園ねいの里の湯浅純孝氏、富山大学の横畑泰志氏、調査の便宜を図って頂いた株式会社野生生物管理の繁田真由美氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 藤塚治義・畠佐代子・繁田真由美・山本聡子. 2003. 新潟県におけるカヤネズミの新産地および分布の現状. 柏崎市立博物館館報. 59-65.
- 石川県. 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック(動物編), 154pp.
- 金子之史. 1996. カヤネズミ. 日本動物大百科1, 156pp. 平凡社, 東京.
- 村井仁志・白石俊明・間宮寿頼・南部久男・岡圭一・西岡満・神保美和子・森大輔. 2003. 富山県の哺乳類に関する文献1. 富山の生物. 42: 39-46.
- 澤邊久美子・畠佐代子・夏原由博. 2005. 堤防植生の刈り取りがカヤネズミ *Micromys minutus* の営巣に与える影響. ランドスケープ研究, 68(5): 571-574.
- 富山県. 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックとやま- 352pp.
- 全国カヤネズミ・ネットワーク. 2006. 全国カヤマップ2005特別版~カヤ原保全への提言Part 2~. 32pp. 京都.

富山湾で捕れたヒメゾウクラゲ

高山茂樹

魚津水族博物館 〒937-0587 富山県魚津市三ヶ1390

A record of *Carinaria japonica* in Toyama Bay

Shigeki Takayama

浮遊性巻貝のゾウクラゲ類は、魚によく似た形のゼラチン質の体を持っている。日本近海では、頭部触角と烏帽子状の小さな透明な貝殻を持つゾウクラゲ科Family Carinariidaeが3属8種と貝殻だけでなく例外を除いて頭部触角がないハダカゾウクラゲ科Family Pterotracheidaeが2属4種、知られている。これら12種は、黒潮流域およびその周辺、そして世界の温帯・熱帯水域に生息するものが多い(奥谷, 1997, 2000)。

対馬暖流の日本海沿岸では、これまでゾウクラゲ類の採集記録はごくわずかで、1997年4月から6月にかけて対馬海峡から能登半島にいたる日本海西部海域からカプトゾウクラゲ *Carinaria gales* とハダカゾウクラゲ *Pterotrachea coronata*、チュウガタハダカゾウクラゲ *Pt. hippocampus* の捕獲記録があるにすぎない(上野, 1998)。

ところが、2006年7月3日に射水市新湊漁業協同組合に水揚げされたシラエビ *Pasiphaea japonica* の中からこれまでに見たことがない生き物が採集されたとのことで、写真による同定依頼が新湊漁業協同組合の萩原和久氏よりあった。

写真から貝殻が認められるので、ゾウクラゲ科であることは分かった。しかし、写真だけでは貝殻の形が分からないので、後日冷凍保存されたサンプルを貰い受け、同定を試みた。同定の結果、貝殻や尾冠の形状からヒメゾウクラゲ *Carinaria japonica* であった。これまで、富山県沿岸ではヒメゾウクラゲの捕獲記録がないので報告する。

採集個体の記録

採集日: 2006年7月3日

産地: シラエビを漁獲する中層トロールに混獲したため、富山湾奥の海底谷付近が産地

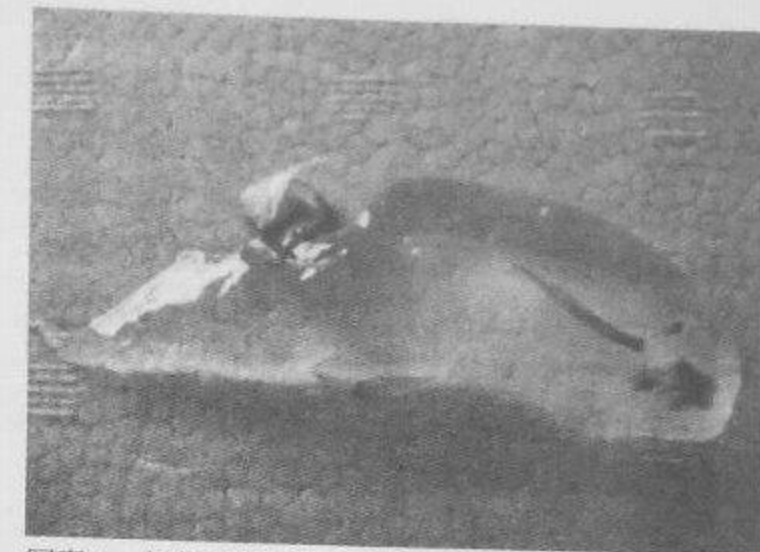


写真1. 採集直後のヒメゾウクラゲ(萩原和久氏提供)

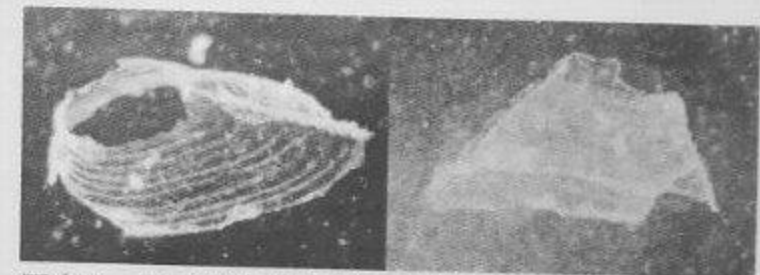


写真2. ヒメゾウクラゲの貝殻

と考えられるが正確な位置は不明。

大きさ: 全長48mm(液浸標本を測定)

貝殻の大きさ: 殻長12mm

殻頂部が欠損しており殻高は測定不能。

備考: 冷凍保存の過程で、同定の決め手となる貝殻の殻頂部が欠損しているが、その他の貝殻の特徴からヒメゾウクラゲに同定した。

今回、ヒメゾウクラゲが採集できたシラエビの漁場は、富山湾の沿岸部に発達する海底谷の斜面に位置している。そして、海底から離れて浮き上がってくるシラエビを掬い上げる漁法がとられている(内山, 2004)。このように特殊化した漁法なので、これまで採集されることが少なかったサメハダホウズキイカ *Cranchia scabra* やユウレイイカ *Chiroteuthis imperator* など中層浮遊性のイカの仲間が、シラエビの混獲生物として発見されている(高山, 未発表)。今後、シラエビ漁の混獲生物の調査によって、これまで生息が確認されていない富山湾の中層浮遊性の生物が見つかる可能性が高い。

この報告を行うにあたって、標本と写真を提供していただいた新湊漁業協同組合萩原和久氏に感謝する。

参考文献

奥谷喬司. 1997. 軟体動物. 千原光雄・村野正昭 (編) 日本産海洋プランクトン検索図説. 東海大学出版会
奥谷喬司. 2000. 異足目. 奥谷喬司 (編) 日本金海産貝類図鑑. 東海大学出版会

上野正博. 1998. 1997年初夏, 日本海西部海域に出現したゾウクラゲ類. 日本海区水産試験研究連絡ニュース383.
内山 勇. 2004. シラエビ. とやま面白学企画編集会議編 とやま面白学 富山の自然再発見. 北日本新聞社.

私の野帳 (県内版) から 5

2つの県内記録の淡水動物

布村 昇

富山市科学文化センター

〒939-8084 富山県富山市西中野町1-8-31

Two freshwater animals new to Toyama Prefecture

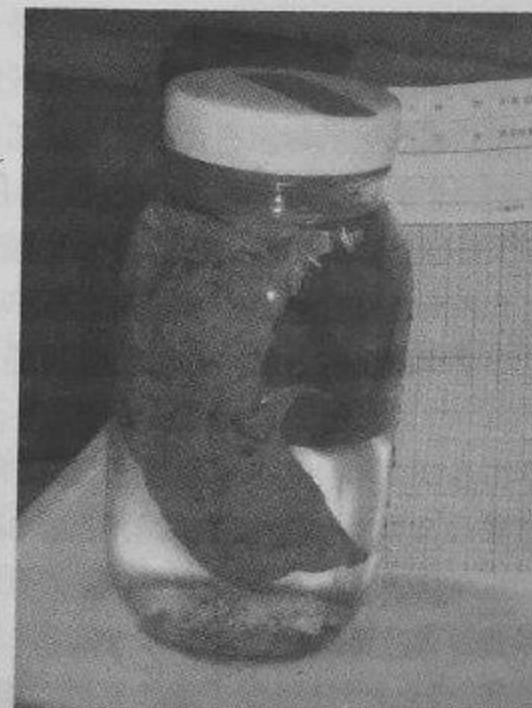
Noboru Nunomura

射水市からオオマリコケムシの出現

平成18年8月4日、富山市科学文化センターに「射水市青井谷の引面池で獲れた正体不明見かけない物体」ということで質問されたものがあった。顕微鏡で休芽を見るとオオマリコケムシ (*Pectinatella magnifica*) であることが判明した。「1 mになる個体もあった。」とのことであるが持ち込まれたのは15cm×6cmであった。

オオマリコケムシは北米原産の帰化種で、日本では1972年に河口湖で初めてみつきり、その後各地で報告されている。“休芽”が釣り人の道具に付着したか、水鳥の脚などに付着して入ったことも考えられる。

なおオオマリコケムシという和名は富山市出身でこの類の専門家であった故織田秀実博士の命名によるという。



富山市で*Pseudocrangonyx*属 (?) ヨコエビ

平成11年から15年にかけて富山市科学文化センターが実施した里山調査で、平成12年6月16日、三熊の民家の古い井戸からメクラヨコエビが採取された。これは尾肢の形態から*Pseudocrangonyx*属と思われる。本属には、シコクメクラヨコエビなどが知られているが、富山県からは報告が無いと思われる。種の同定はできなかったが、全形のスケッチと一部の付属肢のスケッチを示す。形態の説明は省く。

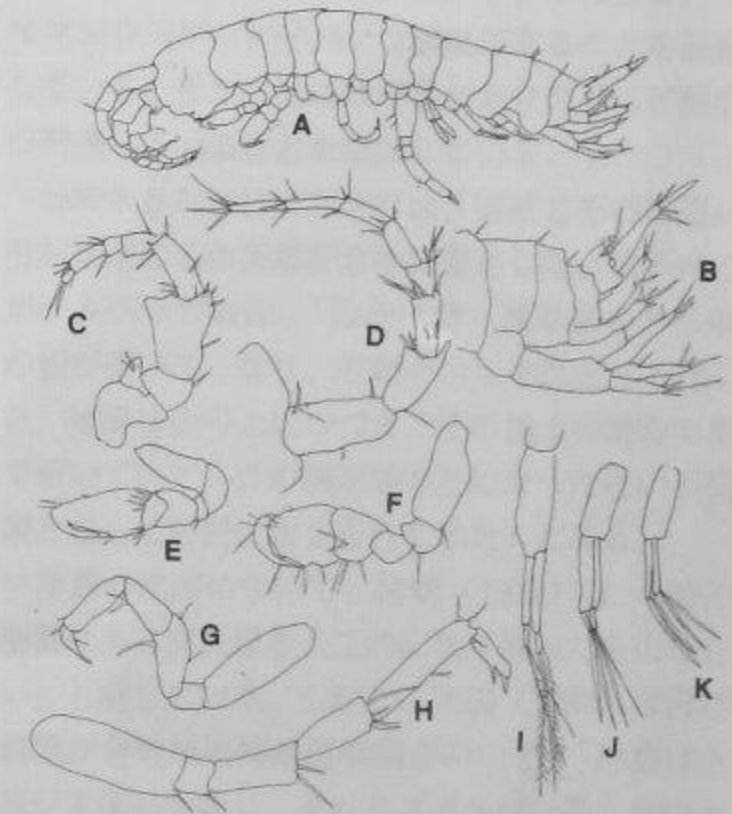


図 *Pseudocrangonyx* (?) sp.
A: 全景; B: 尾部; C: 第1触角 D: 第2触角
E: 第1胸肢; F: 第2胸肢; G: 第4胸肢; H: 第7胸肢;
I-K: 第1-3腹肢